



「無くなる仕事」・「生まれる仕事」がある時代、 能力にリミッターをかけないこと

この秋からフジテレビ系列で放送されている連続ドラマ「僕らは奇跡でできている」、見だした理由は、至って単純で、この大船キャンパスが撮影に使われたものだからです。自分が暮らしている場所がテレビにでも出れば、何となく見たくなるのは人情というもの、図書館棟やコミュニティモール、カフェテリアやグリーンスクエアがとっても綺麗に映し出されていました。

人気俳優の高橋一生さん演じるある大学の動物行動学の先生が主人公の一種の「学園もの」なのですが、この先生が常識人とはかなり懸け離れた感覚や思考の持ち主で、他人の心配事には頓着せず、自分の関心事には固執するやや自己中心的な、周囲の人たちが呆れる所謂オタクタイプなのです。

しかし、この先生、そうはいっても大学の先生だけあって、自分の専門についてはめっばう詳しく、少しでも疑問に感じたことはとことん調査し、何事も厭わず実証しないと気がすまない、学者としてはなかなか見上げたところもあるわけです。

「ここにいる人たちはみんな社会不適合者ですから」といった同僚教員のシニカルなセリフや「大学の先生っていいよな～好きなことやってお金もらえるんだから」といった学生たちの軽い羨望と揶揄を含んだセリフに、大学の先生を見る世間の目ってこうなんだ～と、ある日のカンティーンで数人の先生方とこの話にしばし花が咲いたことがありました。後日、このことを私が楽しそうにしゃべっていたと耳にした口の悪い学部長が、「学長、自分に思い当たるところがあるものだから、結構面白がっていたんじゃないの」と言ったそう。それは、そう言ったご本人が私に直接伝えてくれたので間違いのないことです。でも、この方こそ、件のセリフがかつて学部長会議で話題に上った折、一番高笑いした方で、みんなの視線を一身に浴びた方であったことは、一言申し添えておかなければなりません。

一芸に秀でる人ほどどこかそういうところがあるとは、よく言われることですが、さすがに私は、何も秀でるところがないものだから、極めて真っ当な常識人と自分では思っています。

アインシュタインは、幼児期にほとんど言葉も話さず、中学生の頃まで妹と庭で玩具遊びに興じていたと聞いたことがありますが、こうした人たちは、学校教育の枠にはなかなか納まらない、むしろ学校教育の物差しで見計らえば、あのアインシュタインは生まれるはずがないということになるのかも知れません。無論、学校は学校の尺度がなくってはならないわ

けですが、しかし学校で計られる力が人間の全ての力ではないということもまた事実なのでは・・・。

20世紀のアメリカを代表した哲学者・教育学者のジョン・デューイが、こういうことをいっていました。「学校はげに未成熟者の^{せいこう}性向を形造るために経験伝達の須要機関である。但し、それはただ一個の手段であって、一中略— もっと根本的な永続的な教育法の必要を理解した時にのみ、吾らはただその一手段としての学校教育の地位を確認することができる[※]」。昔から私は、このデューイの指摘はむしろ学校教育に携わる者こそ頭のどこかに置いておかなければならない大事な戒めではないかと思っています。

そこで立ち止まって考えてみれば、そもそも学校は、評価されるために行くのではなく、自分の可能性を見出すために行くのです。特に今の子どもたちは、10年から20年後には「無くなる仕事」があると同時に、反対に「生まれる仕事^{しょうじゆう}」がある時代を生きるわけですから、今の評価基準には乗ってこない能力だって将来どう高く称揚されることになるかも判らない、だとすれば自分の好きなものに力を注ぐことこそ最も賢明なことのようにも思えてくるわけです。

ある官僚の方がこういうことをいっておられました。「自分は、小学校5年生の時、スポーツか受験かの選択ではなく、ピッチャーかバッターかの選択に悩んだのだが、その頃王選手がホームランの世界記録を作ったものだから、バッターを選択した。ところが、バッターには余計成り手が多く、正選手にはなれず仕舞いで、結局気がついたら官僚になっていた。でも、今は、ピッチャーとバッターを両方やって腕を磨き、メジャーリーグで活躍している人だっている。だからこそ、子どもの能力にリミッターをかけないことが大切なんです」と。

リミッターとは、運動や出力、その可能性に制限をかけることだそうです。

※デューイ著『民主主義と教育』帆足理一郎 訳 玉川大学出版部

[>前のページへ戻る](#)